

夕立のヤンデレに挑戦 しただけ

生活リズム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。（ロリコンは嘘をつかない）

艦これをロクにやってないのに投稿するとか自分でもバカだと思う

目次

夕立のヤンデレに挑戦しただけ | 1

夕立のヤンデレに挑戦しただけ

提督というものは厄介なものだ。

執務は良い。元々私はそういう事が苦にならない性分である。寧ろ今では執務こそが私の心の拠り所だ。

問題なのは指揮だ。私なんぞが彼女たちの命を背負っていいのだろうか。この事は重く私にのしかかってくる。

出撃はもちろんのこと、演習や果ては日々のコミュニケーションまで、そのどれか一つを考えただけでも胃がキリキリと締め付けられる。どのどれか一つに不備があつたらと思うと……。

ああ、もうダメだ。胃薬を飲まなければ。ああ、化学は素晴らしい。こいつがなければ今頃私は自殺していたに違いない。

何よりも彼女だ。私の胃痛の大きな原因である、夕立という名の彼女。美しい見た目をしていると思う。絹のような金髪、整った顔、赤い、紅い目。いわゆる美少女という言葉だ。改になってからは少女らしさは薄くなつて、大人っぽさが増したが。

性格の方も一般的に見れば良い子だと思う。スキンシップが過剰で、褒められると

オーバーに喜ぶ。忠実で、仲間思いで、何というかこう、忠犬という言葉がふさわしい。だから大抵の人間は彼女に欲望を抱くだろう。それでも私は彼女を好きになる事ができない。彼女が私に好意を持っているとしても、だ。

朝が来た。来てしまった。私の数少ない安らぎでもあった夜は終わり、無慈悲に太陽は登ってしまった。仕方がないので身支度をして着替えることにする。どうせ夕立が用意しているだろう。していなければ万々歳だ。

扉が開いて夕立が入って来た。今日こそはと期待していたのだが。

「提督さん、おはようっぼい！」

ああ、おはよう。

「着替え持ってきたっぼい。」

サンキュー。

「ゆーあーうえるかむっぼい！」

・・・
夕立。

「どうしたっぼい？」

毎度のことだが、私が着替えている時には部屋にいないでくれないか。

「どうして？」

私も一応男でね。着替えを見られるのは流石に恥ずかしい。

「そんなことなら大丈夫っばい！提督さんと夕立の仲ならセーフっばい！」
そうかい。

「そうっばい！それじゃ、提督さん。夕立はお仕事に行ってくるっばい！」
危なかった。彼女があっのほい口調ではなくするのは怒っている時だ。彼女を怒らせたらどうなるかは私が一番よく知っている。かつてのことをもう一度繰り返すようなバカな真似はしない。してたまるものか。

朝食である。1日のスイツチを入れる大事な時間でもある。なので私は朝食を欠かしたことは一度もない。たとえ昼食と夕食を抜かそうともだ。夕立のお陰でそんなことはなくなつたが。

食堂につくと時雨がいた。

「おはよう、提督」

時雨。夕立の姉妹艦であり、私とは適度な距離を保って接してくれる数少ない艦娘だ。彼女の存在は私の中でかなり大きい。

「今朝も夕立が…？」

ああ。

「ごめんね。僕が不甲斐ないばかりに。」

そんなことは無い。君のお陰で私は助かっている。礼を言いたいぐらいさ。

「ふふ、そう言ってくれたら嬉しいよ。」

いつだったからだろう。夕立がおかしくなってしまうたのは。

いつからだろう。時雨の存在感が私の中で大きくなっていったのは。

いつからだろう。

間宮さんお手製の朝食は今日も絶品だった。